

「先生と私」

浜松市 中嶋 健二

私が折金紀男先生に出会ったのは平成二十五年九月七日。浜松市の笠井協働センターであった。まだ夏の暑さが明け切らない残暑の厳しい日だった。

浜松市では『浜松ヒューマンセミナー』という講座がある。

凡そ、一年を五月から八月と九月から十二月の二つの期間に分けて、各々の協働センター（旧公民館）で地元の講師を招き、講座を開く。そのジャンルは多岐に渡り、文学・文藝を取り上げたものから、郷土の歴史まで。更には料理やスポーツもある。時間帯も様々で、市民は自分が受けたと思うものを自由に選択し、応募することが可能だ。宛ら市全体で分散的に行う大学の授業のようだ。この取り組みはどれ程以前から行われていたか私は知らない。少なくとも十数年は続いていると先生は仰っていた。

私は父親の転勤や、大学進学のため地方へ移り住んだ期間があるといえど、浜松に住んで十年以上は経つ。それにも拘らず、そういった講座が開かれていることを去年（平成二十五年）の四月まで全く知らなかった。私がそれらを知ったのは本当に偶然で、市のHPを見ていたらたまたま募集が掲載されていたのだった。

元来知識欲が深い私は早速応募することにした。生憎、どのセミナーも平日の日中が主で、条件に合うものは僅かであった。しかも条件に合致してなおかつ私が受けた

いと思うものは本当に僅かであった。一例を紹介すると、源氏物語を原文で読む、昭和の文豪の作品を読み解く、市の歴史を学ぶ、などなど。いずれも学生時代に踏み込めなかったものや、逆にここでしか学べないものだらけで、仕事さえなければ受けてみたいものばかりだった。それでも前期に二つ、後期に三つ受講することが出来た。折金先生の講座はその後期の三つの内の一つに当たる。

『日本史のおさらい 昭和史1』というタイトルだった。昭和時代に活躍した人物に焦点を当てながら、昭和時代を振り返るという内容で私は概要だけを見て、興味を惹かれすぐに応募した。

後ほど知ることとなるが、先生の講座は大変な人気で定員四十八名のところ、その倍以上の応募が毎年のようにあるという。私がこの講座を発見したのも偶然であり、私が参加可能な土曜であったというのも偶然であり、当選したのも偶然であった。先生との出会いは、その全てに於いて何一つ計らいの無い偶然のみが関与したものだっ

私は、週末学校でこの課題があると訊いた時から是非先生を取材したいと考えていた。地元の年配の方で、尊敬出来る人、話を聞いてみたい人は先生を置いて他にはいなかった。それ程に先生の授業は鮮烈な印象を持って私の中に響いていた。

私は笠井協働センターの方に事情を話した。全てを理解してくれ、先生に伺っていただけのことになった。二日待つて返事が

あり、先生が快諾してくれた旨を伝えられた。

課題や仕事に追われ、あまりにハードなスケジュール故、準備する時間は殆ど無かった。先生に聞きたい事を列挙し、事前にメールした。先生は楽しみにしていると返して下さった。

平成二十六年五月二十三日。

偶然にも先生のご自宅は職場からすぐの場所だった。そのことにも私は縁を感じずにはいられなかった。

夕方、先生のお宅へお邪魔した。奥様が出られて、その後に先生が書斎から姿を現した。半年振りに拝見する先生はお元氣そうだった。

「久しぶりだね。よく来たね。さあ、上がりなさい」

人見知りの私は講座の期間、四か月もあったにも関わらず、先生と殆ど話す事はなかった。挨拶は必ずするようには心がけていたが、それだけであった。先生の授業は人気で他にも休憩時間や終了後に質問や雑談に来る方が沢山おられたので、私はいつも控えていたのだった。それにも関わらず先生は私のことをよく覚えて下さっていた。「私の講座は年配の方が多からね。若い人はよく覚えていますよ。君とあと一人若い方がいたが、二人はマスコットの存在でしたよ」

先生はそんな風に言って笑った。先生はお歳が七十三にもなるというのに、純真な子供のように笑う。

先生の書斎は玄関を入ってすぐ右の部屋だった。畳に大きな机が二つ。私は手前に

座り、先生はPCが置かれた奥側に座った。まず驚いたのは書斎にあるその本の多さだった。

「(夏目)漱石と(藤沢)周平が好きだね。本のタイトルにそれらが少しでも入っているとつい買ってしまっんだ」

私はそれらの書籍の数に驚愕するとともに、一方で酷く納得していた。何故ならば、先生の授業は種々の楽器で奏でられるオーケストラのように重厚な知識と豊かな感性に基づく優しい授業だったからだ。



先生の書斎の本棚。漱石の作品集(かなり状態が古かったので初版本かもしれない)や周平の本が並ぶ。

先生の授業は独特で、日本史の筈なのに何時だって引用は本からだった。

その当時流行った歌謡の歌詞。文人・歌人の詩の引用。授業で扱った人物は、平塚らいてう、寺田寅彦、吉本隆明、柳田国男、茨城のり子、金子光晴、高橋是清など。

先生は時代や歴史を語る際に、必ずその当時生きた人に光を当てた。その人が何を考え、国の為に、社会の為に一体何をした

のか。主観的だけでなく、客観的な立場からもアプローチをした。私はまるで昭和にタイムスリップしたように思いながら先生の話聞いていた。昭和の終わりに生まれた私には所謂昭和時代に実感は湧かない。けれど、そんな私でも十分に想像つく豊かな授業であった。

つまり、先生の授業は単なる知識の付加では終わらなかった。生きた知恵を私達に与えていた。

何故先生はこれほど魅力的な授業が出来るのだろう。どうしてこんな作家のこんな詩を知っているのだろう。授業中ずっと疑問に思っていたことが、先生の書棚を見て少しだけ理解出来たように思った。

私はこの取材の経緯と、理由を先生に率直に話した。先生はとても嬉しいと言って下さった。

先生の近況などを聞きながら話は進んだ。先生の控え目ながらも秋虫のように優しい声はとても懐かしく感じた。先生は最近滑舌が悪くなったので、と言ったが、私はそんなことはないと言った。先生は少しでも発音がよくなるように、授業の前日には必ず早口言葉を練習するのだと言った。そう言って手書きのメモを私に見せてくれた。失礼と承知しながらも、可愛らしいと感じた。

取材は順調に進んだ。私も漱石が好きだったので、思わぬところで意見が合い、取材以外の話でつい盛り上がってしまい、一時間の予定のところが三時間以上も話し込んでしまった。奥様が心配なされて幾度か様子を見に来られたほどだった。

先生がこのセミナーを始められたのは二年前。当時、高校の日本史の教師を退職なされ、すぐにこの話が来たのだという。「笠井公民館に私の教え子がいてね。『先生、むずかしくない歴史や文学のお話しをしませんか。』そんな軽い感じで始まったんだよ」

当初は先生の好きな藤沢周平の作品についての講座だった。しかし、受講生の方から要望があって日本史を古代から始めたのだという。

「ある方から『私は日本の歴史をよく知らないから、一から教えて欲しい。』と言われたのがきっかけでそれこそ縄文時代から始めた。二、三年でやめるつもりだったけど受講生に励まされて、気付いたら十二年も経ってしまつて……。遂に昭和時代にまで来てしまった」

先生は照れ笑いをされた。止めなくてよかった。続けてこられたから私は先生に会えたのだから。そんな風に言った。すると先生はそれもそうだねと笑った。

講座を通して様々な事があつたと先生は言った。どのエピソードも興味深かった。「自分よりも年配の方も聞きにきていらつしやるから、その方の方が余程詳しいこともあつたりして……」

先生は九月から始まるこの授業の為に、前半の半年は自分で勉強するのだという。どういう授業にするのか。方針が決まれば、出来るだけ取材に現地に出掛たりもするのだという。

「実際に現地を訪れて当時と今の姿を重ね

てみる。

つい先日も周平の作品の舞台である両国へ行って来たんだけど。昔は川が通り、柳が生い茂っていたらしいんだが、今は堀割の上を首都高が走っていたり、でも思いがけないところに当時の遺物があったりして実際に行ってみると発見があり、その時代への想像も膨らんでくる」

先生は悪戯気に笑った。



先生の書齋に貼られていた江戸時代の両国の地図。取材の前にこうして眺めて頭にイメージを浮かべておくのだという。

「実際に訪ねて得た情報は聞いてくださる方々にもよく伝わるように思うし、また、相手の心にも残るような気がします。七月には熊本へ行って漱石の『草枕』の舞台になったところを歩いてみるつもりです」

あれほどの読書量にも飽き足らず、先生はそれ以上の努力をされていた。

それだけではない。受講した当初から感嘆していたのだが、先生の講座で用いる教科書は完全オリジナルだった。高校の教科

書や昭和史を編纂した特別な資料などから先生が独自に引用して作られた完全オリジナル。しかも、表紙は一つひとつ異なっていて、将に世界に一つしかない自分の教科書となった。

「あれは同じ用紙がなかっただけで、それを誤魔化すために全部違う装丁にしたんだ」

先生は言った。

私は他にも四つセミナーを受けた。いずれの講座も特徴があって本当に面白かったのだが、先生ほど丁寧に時間をかけて授業を構成している方はいなかった。



セミナーで配布されたオリジナルの教科書。表紙が人によって全て違う。

取材の終わり、私はずっと疑問に思っていたことを訊いてみた。大変失礼だと分かっているながらも聞かずにはいられたかった。即ち、先生は何故そこまでしてこのセミナーをやっておられるのかということだった。

正直受講生からの参加費は非常に少なく、市の補助があったとしても全くの薄利であり、これだけ手間をかけているのなら、寧

る赤字であるかも知れなかった。金銭的な側面に於いて、先生の得になることは一つも無かったのだ。

先生は静かに笑ってこう答えられた。

「私は三十年以上高校の教師をしてきて、退職してやっと一方的に教えるという「授業」から解放されました。

学校の授業というのは受験に必要なとか、単位を取るためだとかいう要素が入ってきてどうしても受け身になってしまう。生徒たちとじっくり歴史の面白さを語り合うということもあまりできなかった。

このセミナーに参加される皆さんは自分から進んで学びに来られているんです。そういうみなさんと歴史や文学を語りあえるのですから、今の方がとてもやりがいがあります。中には腰が曲がっているにも関わらずバスを乗り継いで遠方から来られる方もいます。いろいろな人生経験を積まれた方々と出会い一緒に語りあえるのですから自分はとても貴重な時間を与えてもらっていると思っているんですよ。それだけに責任も感じていますけど」

私は分かっているながらも矢張り訊かずにはいられなかった自分を深く恥じた。先生は矢張り何処までも先生であったのだった。

気付いたら、外は真つ暗であった。三時間以上も休みなく喋り続けてしまった。奥様が心配なさるのも無理はなかった。仕事終わりそのまま寄らせていただいたにも関わらず、私は不思議と疲れを感じなかった。寧ろ、楽しくてならなかった。それは先生も同じことだったのか。こう仰って下さった。

「これを機に、また何時でも寄ってください。今日は本当に楽しかった」

先生は去年から前期も別の協働センターで講座を担当されているという。他にも浜松市にある文芸館というところでも講座を担当しているという。年を経る毎に先生はご多忙になられ、寧ろ若返っているようにさえ思う。

先生の家は高台にあり、外からは浜松市内が一望可能だった。まるで夢のように灯りが転々と灯り、遠くの方にはアクトタワーが聳えている。黒い闇の中で明滅するそれらの灯りは幻想的であり、私は暫く見惚れてしまった。奥様も先生もこの景色が好きだという。

近年、浜松市では公務員による不祥事が相次いだ。市職員の軽犯罪に止まらず、高校の教師が生徒に体罰を働いたことで全国的な話題になったこともあった。私は市を覆う暗いニュースに、また自分がその職員の一員であることに言い様のない不甲斐なさを抱いていた。

しかし、昨年偶然にもこの浜松ヒューマンセミナーという素晴らしい取り組みを知った。何十年も前から、細々とながら、しかしこれほど尊い活動が続けられていることに私は感動し、同時に誇らしく思った。これからも出来るだけこの活動に参加していきたい。そんな風に思う。

折金紀男先生（先生の書齋にて）

